

二〇三三年七月二一日

まなかひに甲山見えバス涼し

せいじ

二〇三三年七月二〇日

瀬の楽の遠近となる避暑の径

せいじ

二〇三三年七月一九日

観覧車抽んでてをる夏木立

かえる

山湖涼し汀をつづる樹々もまた

はく子

激つ瀬をひと筋よぎる蜘蛛の糸

せいじ

二〇三三年七月一八日

苗筋の乱るる風の青田かな

明日香

二〇三三年七月一七日

端居して口達者なる子の相手

もところ

二〇三三年七月一六日

栈橋にひとり佇む藍浴衣

澄子

久闊の友と地産の鱧づくし

千鶴

夜濯ぎや明日の遊山もこの服で

うつぎ

二〇三三年七月一五日

独り居となり冷蔵庫大き過ぎ

うつぎ

一文字波止を呑み込む土用波

素秀

キャンプ飯なればお焦げもまた旨し

きよえ

赤紫蘇の染みたる指でキーボード

むべ

毎日句会みのる選・二〇三三年七月二三日